土地の記憶の発掘・継承・発信の試み
―サウンドスケープの考え方と日々の暮らしから―

鳥越 けい子
KEIKO TORIGOE

1．はじめに

私の故郷は、東京杉並の北西に位置する善福寺というまちである。まちの中心には池がある。池とその周囲は都市公園になっている。

多くの地元住民と同じく、私はこどもの頃から、この池の畔で多くの時間を過ごしてきた。多摩丘陵が集めた水が地下に潜り、武蔵野台地に降り注いだ雨と一緒になって、関東平野の扇端のところで、地上に湧き出した善福寺池。（図1・図2）大人になり、その音風景の豊かさに気づいてからは、「水に選ばれた場所」の畔に暮らす幸福と、この池を公園にして私たちに残してくれた先人たちへ深い感謝の念を抱くようになった。

そんな気持ちを地域の人々と分かち合うため、私は今、地元をはじめとする多くの人々との連携・協力のもと、〈池の畔の遊歩音楽会〉というプロジェクトを企画実施している。普段はあまり気づくことのない音環境資源の存在と共に、目には見えないこの「土地の記憶を発掘・継承・発信」することが、このプロジェクトのめざすところである。

ここでは、その背景にある考え方、それを踏まえたデザイン活動の事例を解説すると共に、私の人生と日々の暮らしを振り返り、〈池の畔の遊歩音楽会〉とそこに至るまでのいくつかの活動を紹介・解説したい。

2．サウンドスケープという用語とその考え方

私の専門は「サウンドスケープ soundscape」である。これは「ランドスケープ landscape」からの造語で、1960年代の北アメリカの「環境運動・環境思想」を背景に、カナダの作曲家にして環境思想家のマリー・シェーファー R.Murray Schafer（1933年―）が考案・提唱したものである。

「今日すべての音は、音楽の包括的な領域内にあって、とぎれのない可能性の場を形成している。新しいオーケストラ、鳴り響く森羅万象に耳を開け！　音を出すすべての人、すべてのものが音楽家なのだ！」（＊1）…これは、シェーファーがその主著『世界の調律』（原著 *The Tuning of the World* の出版は1977年）のなかで綴った文章である。

「サウンドスケープ」は、一般に「音の風景」と訳されるが、専門的には「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の

図1：善福寺上池

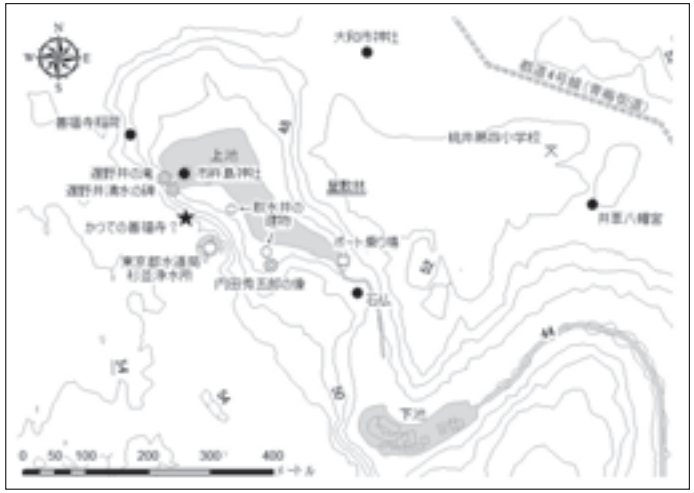

図2：善福寺池周辺の等高線と施設等の配置
（標高・水域データについては国土地理院 基盤地図情報、道路データについては国土交通 省国土数値情報よりダウンロードして作成／地図作成作業協力：森岡渉）
＊9の文献より転載

環境」と定義されている（＊2）。その構成音は、音楽や言語も含む「人為・人工の音」から潮騒や風の音、虫や鳥、動物等の生物の音などの「自然の音」や、静けさや賑わいといった音環境の特定の状態、さらには「記憶の音」や「伝承の音」（特定の地域で生活を営む人々の主体性や文化的理解を色濃く反映する音）までをも含む。

サウンドスケープの考え方は、西洋近代の「視覚中心社会」に対して、聴くことの重要性を問い直すとともに、音の世界から身近な環境を捉え直し、最終的には「ソーシャル・デザイン」をはじめとする、各種デザイン活動（それを総称して「サウンドスケープ・デザイン」と呼ぶ）に生かしていこうとするものである。

五感によって分断しがちな風景を全身感覚に繋げ、形に留まることのない「見えない環境」を扱うサウンドスケープは、特定の土地の記憶を辿りながら「現在の風景」を未来に繋ぐ働きもする。音の世界を切り口としながらも、ランドスケープの全身感覚性、また特定の場所やその土地の歴史との分かち難い関係性を喚起しようとするという意味で「まちづくり」においても重要な役割を果たす思想であり、考え方である。（＊3）。

3．瀧廉太郎記念館とサウンドスケープ・デザイン

善福寺の池の畔で、豊かな自然と文化の音に囲まれて育ったことは、私にとって自分自身の興味関心が、大学時代に専攻した「音楽学」から「サウンドスケープ研究」へ拡がった原因のひとつであるに違いない…　そんな想いを抱くようになったきっかけは、１９９２年４月に開館した「瀧廉太郎記念館」（大分県竹田市）でその庭園設計を担当したことだった。

１９８０年代の後半から、私はサウンドスケープの考え方を踏まえた各種の環境デザインの仕事に携わっていた。そうしたなか、記念館の全体計画を監修していた建築家の故木島安史氏より、次のような説明と依頼を受けた。…竹田の城下町の一角に、岡藩藩主中川家の家臣だった岩瀬家の屋敷がある。現在は一般住宅として使われているその建物と敷地を、竹田市が買い取り「廉太郎記念館」を開設するに当り、家屋は瀧家が住んでいた明治20年代の状態に復元するが、庭についてはその手法は使えない。記念館の主人が、我が国西洋近代音楽揺籃期における最初の本格的な作曲家のひとりなので、庭園デザインにおいて音環境の面で何か特別な工夫をして欲しい。

〈花〉や〈荒城の月〉などの作曲者として広く知られる廉太郎。こども時代にはどのような家や庭の音風景のなかで暮らしていたのかということに、私は大いに興味をそそられた。そのため、来館者が「少年廉太郎が暮らしのなかで体験していた音風景」を追体験するための庭づくりを基本コンセプトとし、その作業をサウンドスケープ・デザインの手法で展開することにした。

私は先ず、「廉太郎が聞いた竹田の音風景」をテーマに、旧宅およびその周辺地域をフィールドにした「観察調査」「聞き取り調査」「文献調査」を行った。そして、廉太郎が当時の家や庭で聞いていたであろう多種多様な音のなかから、いくつかの項目を選び、それらを復元もしくは新たな形で再現するための手法を検討しながら「音風景からの庭づくり」をまとめた（＊4）。

サウンドスケープ・デザインとは、単なる「音のデザイン」ではない。特定の地域に現に存在する、あるいはかつて存在した音の社会的・歴史的・文化的背景を調査分析（つまり「サウンドスケープ調査とその研究」）を行い、その結果を家づくり、庭づくりまちづくり等のデザイン活動に生かそうとするものなのである。

4．故郷の音風景との再会

廉太郎記念館がオープンした頃から、音の風景をキーワードに故郷の環境文化資源を発掘・発信することを目的としたさまざまなプロジェクトが、全国各地で企画・実施されるようになった。環境庁（当時）は、それらの動きをまとめる形で〈残したい日本の音風景１００選〉事業を展開し、１９９６年にその結果を発表した（＊5）。その後も「音風景」を手がかりとした環境資源の発掘・保全のためのプロジェクトは、日本各地でさまざまな形で提案・実施された。私自身もそのいくつかに関わり、推薦された数多くの音風景の現場を訪ね、それらの調査を行うようになった（＊6）。

そうしたなか私は、自分自身が暮らすまちでは、音風景について人々と話し合い、まちづくり等のデザイン活動に関わる機会の無いこと寂しく思うようにもなった。そこで、せめて（自分自身が、廉太郎記念館で試みたように）こどもの頃に体験した音風景を追体験できるような家に住んでみたいと考えた。その結果、祖母の借家での習作を経て、現在の自邸（風聴亭／屋敷林に代表される地域の風土を聴くための家）の基本構想と設計・施工に至り、２０００年からそこに住まうようになった。

その後、私は先ず、地元のミニFMラジオ局「善北こどもネットワーク」（通称「ラジオぱちぱち」）への参加、次に、善福寺池とその周辺地域を拠点に開催される「トロールの森」への参加プロジェクト〈池の畔の遊歩音楽会〉の企画と実施、さらには同まち歩きプロジェクト〈西荻→善福寺池フットパス〉、等、地元での各種活動のなかで、故郷の音風景と自分自身との関係とを繋ぎ直すようになった。

「ラジオぱちぱち」は2001年、善福寺北児童館の学童クラブで知り合った親子たちが結成したグループで、同児童館の特設スタジオから毎月第2土曜日、午前10時から2時間の放送を基本にさまざまな活動を展開している（図3）（＊7）。小学校時代の友人から「専門がサウンドスケープならラジオにも興味があるだろう」と誘われた私は、2003年にそのメンバーとなり「教えてその音！」という番組をもつようになった。

一方「トロールの森」は、2002年に始まった善福寺公園（上池）を会場とする野外アート展である。2009年には、それまでの「野外展示」に、音楽や踊り等の「身体表現／パフォーマンス」部門が、また翌年には、西荻窪駅（JR中央線）と善福寺池を繋ぐエリアに位置するさまざまな施設を利用して開催される「まちなか企画」が

図3：ラジオぱちぱち周年記念放送（本橋泰蔵米店前）

図4：池の畔の遊歩音楽会2010での辻康介

加わり、今では善福寺のまちで毎年11月の20日間（文化の日から勤労感謝の日まで）開催される「アートによるまちづくりイベント／地域の文化祭」として定着している（＊8）。

私は当初、一住民として「観る側」にいたが、2010年〈池の畔の遊歩音楽会〉の企画実施を通じて「演じる側」となった。その背景には、善福寺池の風景をさらに深く味わいたい、そのためには池の畔を舞台とした音楽活動を始めよう、なぜなら音楽とは本質的に環境を聴く行為だから、そのようにして発掘した善福寺池の環境文化資源をここに暮らす人々と共有したい、〈トロールの森〉に参加できるのなら、それは故郷における私のまちづくり活動、私を含む地域コミュニティのサウンドスケープ・デザイン活動そのものになるだろう…という思いがあった。

5．〈池の畔の遊歩音楽会―音のすむ森に捧ぐ！〉

「遊歩音楽会」とは、歩きながら行う音楽会の総称。〈池の畔の遊歩音楽会〉は、私が故郷の池のために企画し、2010年の初演以降、毎年1回「トロールの森」開催期間中の特定の日に、善福寺池（上池）を約1時間かけて歩き（回遊）ながら実施するプロジェクトのタイトルである。

〈池の畔の遊歩音楽会〉は当初、音風景案内人（ナビゲーター役の私）による「語り／解説」と、吟遊詩人（歌手の辻康介氏／図4）による「うた（歌・謡・吟）」、両者の掛け合いを基本のスタイルとするものだった。池の周囲で予め選んだいくつかの地点で、その場所の来歴等について私が解説をし、辻さんが私の思いを歌にして吟じる。参加者はそれぞれの場所特有の気配を感じ、土地の記憶に思いを馳せる。

そのようにして生まれた歌は、音楽会の回を重ねるごとに少しづつ増え、池周囲の各地点に蓄積されていった（図5）。パーカッションやサックス奏者といった音楽家たち、さらに私の大学のゼミ生たちも参加するようになり「池の畔の遊歩音楽会チーム」ができあがっていった。当初設定した構成を基本としながらも、毎年チームの皆で、その年のプログラムと必要な歌（これまでの歌からどれを使うか、それとも新しい歌をつくるのか）、音具その他の道具についての検討するようになった。

基本コンセプトは終始、参加者が池の畔に存在するさまざまな音や気配の存在に気づき、その土地の記憶や歴史に思いを馳せること。音楽会冒頭の挨拶で、私が参加

者に「この音楽会を楽しむため心得」として伝授するのは次の三か条である。

一、音楽と池の音、この地域の音とのセッションを楽しむ。池も公園も、ライブで音楽を奏でている。

二、移動しながら、日差し等を含め、時間的に変化するその風景、景色の変化と音楽とのセッションを楽しむ。

三、音楽の力を通じて呼び覚まされた土地の記憶や歴史に想いを馳せる。

ここで思い出していただきたいのは「瀧廉太郎記念館の庭園デザイン」のため、私が「廉太郎の音風景」をテーマにサウンドスケープ調査を行ったこと。つまり〈池の畔の遊歩音楽会〉を契機として、私は故郷の池とその周辺地域をフィールドにしたサウンドスケープ調査研究を始めることになり、その作業は現在も継続中である(＊9)。

図5：池の畔の遊歩音楽会2017フライヤー（部分）

6．故郷の音風景の歴史と今

故郷の音風景の「歴史」について分かったこと・考えたことを、箇条書きしてまとめると次のようになる。

・武蔵野台地における貴重な水と緑の拠点。社会・文化的にも重要な意味をもつ武蔵野三大湧水池のひとつが善福寺池である。豊かな水音がこの土地の「基調音」だった。

・池の畔には旧石器―縄文時代以来、一貫して集落が形成されてきた。寒冷な気候のなかでは、黒曜石等の石材から石器を作成する音が響いていたと思われる。温暖な気候となってからは、現代にも通じる里山的な音風景が広がっていたはずである。

・池は水の物理的な供給地に留まらず、人々を救う「聖なる空間」として地域の暮らしを支えた歴史が織り込まれた「トポス」を形成している。中ノ島には水の女神を祀る市杵島神社があり、太鼓を叩いて「ホーホィ、ナンボエ～」と唱えながら歩く雨乞いの行事が行われていた。

・池の旧名は「遅野井」で、その名に関しては「頼朝の遅野井伝説」がある。池近くに位置する井草八幡宮の旧名もまた「遅野井八幡」。そこでは古くから、祈祷の声、祭りの音が「土地固有の音」だった。

・善福寺という池の名称は、かつて池の畔にあった寺の名に由来するが、その寺院の記録や痕跡は全く残されていない「謎の寺」である。

・池のある現在の杉並区最北部は、中世から近世まで「井草」と呼ばれていた。池周辺の低湿地には沢山の藺草（いぐさ）が生えていたため、あるいはそれらの「池の草」（イケのクサ→「イグサ」である葦（アシヤヨシ）が茂っていたため等の説がある。それら水生植物が、風に吹かれる音も、この土地の「基調音」だった。

・明治40年に井荻村の村長となった内田秀五郎は、池を中核とする地域を「風致地区」とし、地主たちを説得して池とその周囲の土地を東京都に寄付して公園とした。地主たちは風致協会のメンバーとなり、池と公園の整備事業を展開し、池には彼らの作業音が響いていた。

・現在「遅野井の滝」のある地点には、湧水量の一番多いカマ（泉を意味する地元の言葉）があり、水が音を立てて湧いていた。しかし、昭和5年に深井戸が掘られてからは、ここから水が地上に湧き出ることはなくなった。

現在の滝はレプリカで、地下水をモーターで汲み上げ流している。

・明治時代まで、この地域には大きな太鼓が無く、人々は府中の大国魂神社の暗闇祭りで太鼓を叩くのを楽しみにしていた。大正時代になってようやく大太鼓をつくり、昭和54年に「御太鼓講」を結成。その2年後から「太鼓祭り」が始まり、以来毎年5月3日に井草八幡宮の氏子区域で太鼓による巡行を行っている。

音風景の「今」を把握しようとしたとき、その調査手法には多様なものがある。ここでは、音の空間的配置や可聴範囲を表すサウンドプロフィールマップ（図6）を紹介しておく（＊10）。

7．おわりに

〈池の畔の遊歩音楽会〉は、一昨年、これまでの「音楽」あるいは「ハイアート」から「芸能」への越境を試みた。先行する七年間の活動成果を踏まえて、イベントそのものに土地のもつ「気・パワー」との交流という祭祀的色合いを強めたいと考えたからである。そこには、その年のトロールの森の全体テーマが「境界／BORDER」だったというきっかけはあったものの、私たちチームには以前から、自分たちがやりたいことは「西洋近代の芸術音楽」という枠組みには入らないという確信があった。

図6：善福寺池と井草八幡神宮をフィールドにした各種サウンドマップ

「個人の表現」であるアートに対して、〈池の畔の遊歩音楽会〉をある種の「共同体の表現」にしていきたい。その活動を通じて、音の世界から地域の歴史・土地の風土に想いを馳せる感性をもった社会を育みたい。

まちづくりにおけるアートの役割、芸能の役割、そこから見えてくる現代社会の課題について、想いを巡らせる日々が続いている。

【註釈】

＊1　R・M・シェーファー（1986）『世界の調律』平凡社、24頁。

＊2　Truax, Barry ed. (1978) *A Handbook for Acoustic Ecology*. A.R.C. Publication, p.126.

＊3　鳥越けい子（1997）『サウンドスケープ：その思想と実践』鹿島出版会（SD選書）。

＊4　鳥越けい子編（2012）『廉太郎と竹田の音風景』大分県竹田市商工観光課。

＊5　鳥越けい子（2002）「残したい日本の音風景をめぐって」『エコソフィア』№9、33–41頁。

＊6　鳥越けい子（2008）『サウンドスケープの詩学』春秋社。

＊7　https://radio88.exblog.jp

＊8　http://www.trollsinthepark.com

＊9　鳥越けい子（2015）「音風景史試論：遅野井（善福寺池）を中心として」陣内秀信・高村雅彦編『水都学Ⅲ』法政大学出版局、243–262頁。

＊10　鳥越けい子（2018）「善福寺池サウンドスケープ・プロジェクト：2017年の活動」『法政大学エコ地域研究センター2017年度報告書』、38–43頁。